１　授業の実際

前時までに、三年とうげで聞こえてきた歌について、言い伝えと比べながら動作化したり、その歌を聞いたおじいさんの気持ちを想像したりしてきた。子どもたちは、歌を聞いたおじいさんが明るく前向きな気持ちになったことを確かめたうえで本時の学習に臨んだ。

本文の中で、歌は「おもしろい歌」と表現されている。そこで導入では、「誰にとって、歌のどの部分がおもしろいのか」と発問した。子どもからは「おじいさんにとっておもしろい」「『えいやらえいやらえいやらや』という言葉がおもしろい」という意見が出たため、「えいやらえいやらえいやらや」の意味を問うた。すると子どもたちから「おじいさんを笑わせる」「長生きができる呪文」など、様々な意見が出されたため、「『えいやらえいやらえいやらや』の意味を考える」という本時のめあてにつなげた。

展開の場面では、「えいやらえいやらえいやらや」をどのように音読したらよいか考えるよう促した。子どもは歌の音読の仕方を「高い声」「大きな声」「最後を伸ばす」「ゆっくり」「リズムに乗って」など、多様に考えた。そこで、それぞれの音読の仕方の意図を問うたり、友達の音読の仕方について、「どのように聞こえたか」「なぜそのように音読しようと思ったのだろうか」ということを問うたりした。子どもたちからは、「おじいさんが喜んでいる気持ちを出すため」「おじいさんを元気づけるため」「長生きができてめでたいから」といった意見が出された。（図１）このことから子どもたちは、民話独特の言葉の意味を考えながら、言葉の働きについて創出していったと考える。一方で、「低い声で音読する」という意見もあった。理由としては、「えいやらえいやらえいやらや」が呪文のようだから、低く読むということであった。このように、叙述からではなく、自分が想像したことから音読の仕方を考えている子どももいた。実際に全体でその読み方を試してみることにより、子どもたちからは、低く読むことはこの文脈には合わないのではないか、という意見が出された。さらに、民話特有の言葉があることのよさについても考えるように促した。すると子どもから、「あるとおもしろい」という意見が出たので、その意見をもとに、なぜおもしろいと思うのかをたずねた。すると、「おじいさんの気持ちがよくわかる」という意見が出された。（図２）この意見から子どもは、民話特有の言葉の働きを受容したと考える。終末場面では、この他にも昔話で特徴的な表現がないか問うた。子どもからの意見が出なかったので、教師から、民話「ももたろう」に出てくる特徴的な文章を提示した。すると、特徴的な言葉をすぐに見付けることができたことから、民話特有の言葉に着目するというねらいを達成することはできていたようである。

図１　音読の仕方について考えたこと

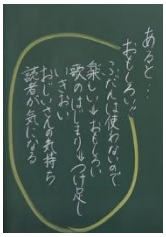

図２　民話特有の言葉があることのよさ

２　今後に向けて

本単元の実践を通して改めて感じたことは、子どもが主体的に学びに向かったり、対話を通して学んだりするための支援の重要性である。本単元では、子どもが文章中にある民話特有の言葉に着目し、その意味を考えることで、より想像をふくらませながら読むことができるよう、単元計画を立てた。計画をもとに実践を行う中で、子ども自らが民話特有の言葉に興味をもち、進んでその意味について考えてみたいと思えることを軸にした単元計画を立てることが必要だと感じた。そこで今後は、子どもの問いを軸にした単元計画を立て、実践を行いたい。

学習後の子どもたちの振り返りには、「民話特有の言葉にも意味があると分かった」という意見が最も多かった。このことから、民話特有の言葉に着目し、その意味を考えることはできたと考える。しかし、言葉から想像をふくらませてより楽しく民話を読むという子どもの姿には至っていない。言葉の意味について、子どもが納得を伴った理解ができる必要がある。また、子どもが音読の仕方について、叙述からでなく自分の想像から考えていた場面もあった。そのような子どもが、自分の考えを見つめなおすためには、やはり他者と意見を交流する過程が欠かせない。子どもが自分の考えを再構築していく姿の実現のためにも、子ども自身が対話の必要性を感じるようにしたい。

以上のことを生かし、今後も子どもが言葉に着目し、言葉の意味を深く考える授業を行っていきたい。